

平成25年度第23回「中村元東方学術賞」授賞式
平成25年10月10日インド大使館

第23回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員会における選考経過をご報告し、併せて授賞理由を申し述べさせて頂きたいと思ます。この度の選考に際しましては、「中村元東方学術賞」審査委員会委員の先生方の他に、過去22回にわたりまして東方学術賞を受賞された方々にも、「中村元東方学術賞」に相応しい功績のある研究者の推薦方をお願い致しました。諸先生から推薦された研究者は、それぞれにすぐれた業績を挙げられており、選定は困難を極めましたが、慎重審議の結果、皆様にご案内状でご報告申し上げましたように、第23回の中村元東方学術賞を

丸井浩東京大学大学院教授

に差し上げることに決定致しました。授賞理由は以下の通りであります。

授賞理由

丸井浩博士は、昭和27(1952)年のお生まれで、昭51(1976)年東京大学文学部印度哲学印度文学科を卒業後、同年東京大学大学院印度哲学専攻修士課程に入学されました。それ以来、インドの論理学派であるニヤーヤ学派、およびその姉妹学派であるヴァイシェーシカ学派を中心としたインド哲学研究をスタートされました。昭54(1979)年同大学院博士課程に進学、さらに昭58(1983)年からは財団法人東方研究会の専任研究員となり、その翌年(1984)1月から2年間、文部省アジア諸国等派遣留学生として、インド・プーナ大学に留学し、文字通りインド哲学の本場で、著名なV.N. Jha教授に師事し、ニヤーヤ哲学の真髄を学ばれました。平成2(1990)年4月には武蔵野女子大学短期大学部専任講師、平成4(1992)年4月には東京大学文学部助教授に就任、平成11(1999)年1月には東京大学大学院人文社会系研究科教授となり現在に至っています。

丸井博士は、最初にヴァイシェーシカ学派の知覚論を、関連文献の綿密な解読にもとづいて解明し、同派の根本経典『ヴァイシェーシカ・スートラ』およびプラシャスタパーダの綱要書(『パダールタ・ダルマ・サングラハ』)のテキスト校訂問題に深いメスをいれた画期的な成果をあげられました。

丸井博士はプーナ大学留学を機に、インド哲学の言語理論のテーマの一つである「vidhi論」、すなわち「命令文の本質的な意味を問う議論」を、ニヤーヤの文献を中心に研究されるようになり、vidhi論の議論構造を明確にすることに成功されました。丸井先生のvidhi論研究の成果は内外に高い評価を得て、第

33 回日本印度学仏教学会賞 (1990 年度) ならびに第 9 回東方学会賞 (1990 年度) を受賞されました。

ニヤーヤ学派の初期の vidhi 論として最もまとまった資料は、9 世紀末にカシミールで活躍した文人ジャヤンタ・バッタが書いた大著『ニヤーヤ・マンジャリー』（『ニヤーヤの花房』）第 5 章です。丸井博士は平成 5 (1993) 年度にハンブルク大学のヴェツラー教授のもとで海外研修を行った折りに、その箇所を同教授とともに講読する機会に恵まれました。その後丸井博士の研究テーマは、ジャヤンタ・バッタのニヤーヤ哲学の解明へと次第にシフトしていきました。

すなわちジャヤンタの小作品『ニヤーヤ・カリカー』（『ニヤーヤの若芽』）の真贋問題、散逸した『ニヤーヤ・パツラヴァ』（『ニヤーヤの小枝』）の断片資料の考察、ジャヤンタの年代論、そしてジャヤンタの主著である『ニヤーヤ・マンジャリー』の作品構成、さらには数多くの作品が散逸してしまった初期ニヤーヤの歴史を掘り起こすために最も重要な、「ācārya たち」と「vyākhyātṛ たち」の論争資料を、『ニヤーヤ・マンジャリー』から網羅的に蒐集し、徹底的に分析する一連の研究、ジャヤンタが言及する「六つのタルカ」を起点として「六派哲学」の概念の展開を辿った試論、初期インド論理学の展開に画期的な新知見をもたらした研究成果などを、数多くの和文ないし英語の論文発表を通じてジャヤンタという思想家ならびに初期ニヤーヤの歴史についての新知見を、徹底的な原典分析と先行研究に対する鋭い批判にもとづいて世界に発信してきました。そしてそれらの成果を博士論文『ジャヤンタ研究—中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学』として集大成し、2011 年 11 月に東京大学から博士（文学）の学位を取得しました。ちなみにその博士論文は、科学研究費の学術成果出版の助成を得て、今年度中に出版される運びです。

丸井博士は日本のインド哲学研究の発展に寄与する若手研究者を数多く育成してきた点でも、まことに顕著な貢献をされています。先生の指導下から、あるいは先生の薫陶を受けて、インドあるいは欧米へと研鑽の旅に送りだされた学生数は 10 名を超え、すでに世界のインド哲学研究の舞台上で活躍する学者に育った人も数名含まれています。平成 23 年度からは科研費基盤研究 A の代表者となり、主だった日本のインド哲学研究者 30 名以上を組織し、「インド哲学諸派における〈存在〉をめぐる議論の解明」という研究プロジェクトを推進しており、文字通り日本のインド哲学研究の最前線をリードする大黒柱として活躍されています。

丸井博士は国際学会でもたびたび発表され、英語論文も多く、国際的な学術交

流の功績も顕著です。昨年 8 月には松本において国際シンポジウム「伝承知の継承と発展」が開催されましたが、これは日本学術振興会とオーストリアの学術振興会 FWF が提携した二国間交流事業として採択された企画が核になっています。仏教論理学の世界的権威であるシュタインケルナー教授の基調講演を含めて合計 25 名の発表が、日本、オーストリア、ドイツ、ポーランド、カナダ、韓国を代表する学者によってなされましたが、仏教以外のインド哲学（ダルシヤナ）の研究者が中心となって、日本で開催された国際シンポジウムとしては最初の試みであり、丸井先生はその企画の日本側を代表する最高責任者として活躍されました。

このようにインド哲学の研究・教育、国際学術交流において、丸井博士は世界的に見ても顕著な成果を収めておられますが、そのほかすべての学問分野から推薦され選出された会員 210 名から成る日本学術会議の会員を 2005 (平成 17) 年 10 月以来、現在にいたるまで務めておられます。その間、哲学委員会の副委員長を 6 年間務め、現在は学術会議の中核組織である幹事会メンバーであり、日本の人文・社会科学全体を代表する顔としても活躍されています。

学会活動へのさまざまな貢献も見逃せません。日本のインド哲学仏教学研究の最大の学会組織である日本印度学仏教学会での活躍、なかでも 2002 年に初めて海外の、ソウルで開催された歴史的な学術大会が大成功を収めることができたのは、当時、学会の筆頭幹事として文字通り獅子奮迅の働きをされた丸井博士の存在がなければ、およそ不可能なことでした。

以上、インド哲学、とくにニヤーヤ学派とヴァイシェーシカ学派の領域における斯学へのご功績はまことに輝かしいものがあります。また学術会議の幹事として日本の人文・社会科学全体に対するご貢献のみならず、国際学会での活躍は、中村元東方学術賞にまことに相応しいものと判断され、今回の授賞となった次第であります。